

羅臼町ネイチャーポジティブ推進に向けた方向性整理

第1章 策定の趣旨と位置づけ

1-1 なぜ今、ネイチャーポジティブなのか

世界的に生物多様性の損失が深刻化する中、自然を「守る」だけでなく「回復」させる「ネイチャーポジティブ（自然再興）」の考え方が重要視されています。

羅臼町は、流水が育む海、サケが遡上する川、それらを支える森の連環の中に暮らしがあります。本町にとって、自然との共生は特別なことではなく、これまでの営みそのものでした。私たちはこれまでも、「羅臼町民憲章」や「知床憲章」の理念のもと、自然の恵みに感謝し、守り、活かし、次の世代へ引き継ぐことを大切にしてきました。

しかし、気候変動や社会構造の変化といった環境変化に直面する今、私たちが大切にしてきた自然と暮らしの関係を改めて言葉にし、将来世代へ確実につないでいく必要があります。

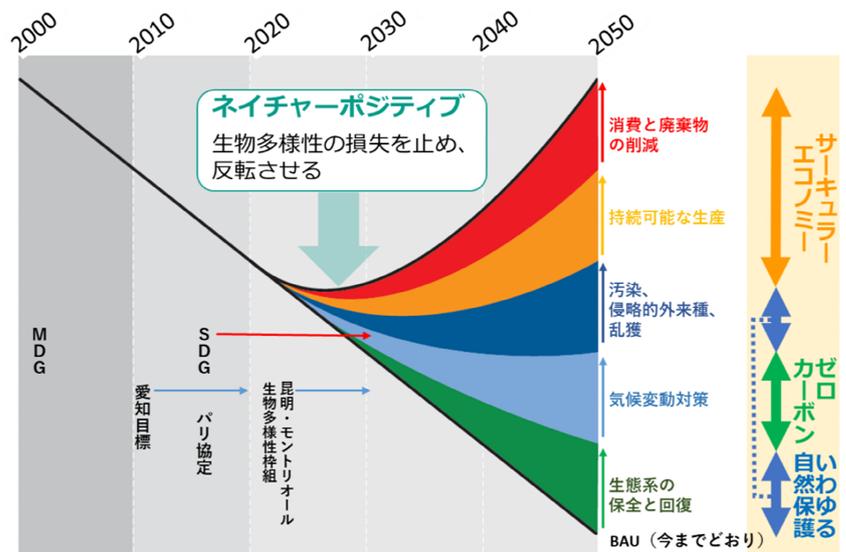
羅臼におけるネイチャーポジティブとは、新たな規制を設けるものではありません。それは、「これまでの歩みを肯定し、未来へつなぐ共通の方向性」を示すものなのです。

1-2 本方向性整理の役割

本資料は「羅臼町ネイチャーポジティブ宣言」を補完し、考え方を共有するための土台となるものです。

新たな数値目標を定めるものではなく、既存の施策を「知床羅臼SDGs ステートメント」や「ESD（持続可能な開発のための教育）」と整合させ、取組の方向性を可視化することを目的とします。

町民、事業者、行政が共通の言葉でつながり、無理のない形で関わることで、一人ひとりが地域の自然と暮らしへの誇り（シビックプライド）や郷土愛を育み、次世代へとつないでいくことを目指します。



生物多様性の損失を減らし、回復させる行動の内訳
出典：「地球規模生物多様性概況第5版（GBOS）」を基に作成

羅白町民憲章

昭和 45 年 9 月 15 日 羅白町

わたくしたちは、雄大な知床連峰と、オホーツクの海原の大自然にはぐくまれた、羅白の町民です。

- 一、 自然を愛し先人の強い意志をうけつぎます。
- 一、 健康で明るくたのしい家庭をつくります。
- 一、 教養を高め、豊かな情操を育てます。
- 一、 仕事に誇りをもち、はたらく喜びに生きます。
- 一、 子どもたちの夢と、若い力を育てます。

知床憲章

昭和 49 年 9 月 14 日 斜里町 羅白町

全文

知床は、自然界のしくみを最大限に見せてくれる日本唯一の原始境であります。緑の山河と青い海は、ここに生息する動植物とともに、きわめて高い学術的価値を有しています。

この貴重な知床の自然は、祖先から受けついだ人類共有の財産として、いつまでも大切に保護されなければなりません。

ここにわたくしたちは、自然の美しさを愛し、その貴さを一層深く認識し、厳正な保護と秩序ある利用のもとに、人間生存の基盤であるこの環境を、永く子孫に伝えるため、国民の願いをこめてこの憲章を定めます。

本文

- 一、 知床の原始的自然をみんなで愛しあおう。
- 一、 知床に接する人は、みんなでその利用責任をもとう。
- 一、 知床のたくましい動植物に、みんなで愛情をそそごう。
- 一、 知床の雄大な海を、みんなで汚れから守ろう。
- 一、 知床の豊かな恵みと美しさを、みんなで後世に伝えよう。

第2章 羅臼町の自然と地域の特性

2-1 海・川・森がつながる羅臼町の自然

羅臼町の自然の最大の特徴は、流氷がもたらす豊かな海から、サケ・マスが遡上する川、そしてそれらを育む森へと連なる「海・川・森のつながり」が、暮らしのすぐそばに息づいている点にあります。

オホーツク海から押し寄せる流氷は栄養豊かな海を育み、豊かな漁場を形成するとともに、基幹産業である漁業を支えてきました。その海とつながる川にはサケ・マスが遡上し、命を次世代へとつないでいきます。さらに、その源となる森林は水を育み、土砂災害の防止や生態系の維持など、地域の安全な暮らしにも重要な役割を果たしています。

このような自然の循環は、単なる環境資源ではなく、羅臼町の産業、文化、暮らしそのものを形づくる基盤です。町民は自然の恵みと厳しさの双方を受け止めながら向き合い、共に生きる知恵を培ってきました。

ネイチャーポジティブは、こうした海・川・森のつながりを改めて見つめ直し、自然の回復と持続可能な利用の両立を図る視点となるものです。



2-2 知床国立公園・知床世界自然遺産地域としての価値と責任

羅臼町は知床国立公園の一部を有し、知床世界自然遺産地域として国内外から高い評価を受けています。この価値は、手つかずの自然が残されていることだけでなく、人の暮らしと自然が共存してきた歴史そのものにあります。

世界自然遺産の指定は、自然を守るだけでなく、賢く利用し次世代へ引き継ぐ責任を地域に求めるものです。羅臼町においては、漁業をはじめとする生業や観光、教育活動など、日々の営みの中で自然と向き合い続けてきたことが、その価値を支えてきました。

今後も、国立公園や世界自然遺産地域と町民の暮らし・産業との調和を図りながら、地域主体による自然との関わりを大切にしていくことが求められます。

ネイチャーポジティブは、こうした羅臼町ならではの価値と責任を共有し、「この町に生きてよかった」という誇りを持って、自然と共に歩む地域づくりを将来にわたって持続させるための考え方なのです。

また、本町はゼロカーボンパークに登録されており、自然環境の保全と脱炭素の両立に向けた取組を進めています。こうした実践を通じて、世界自然遺産・国立公園地域としての価値と責任を踏まえ、自然とともに歩む持続可能な地域づくりを推進していきます。

第3章 第8期羅臼町総合計画（SDGs）との関係整理

3-1 総合計画が目指す「持続可能なまちづくり」

羅臼町の最上位計画である「第8期羅臼町総合計画」は、SDGsの理念を包含し、持続可能なまちづくりを実現するための具体的なロードマップとして策定されています。

この計画では、羅臼の基幹産業である漁業の振興や、安全・安心な暮らしの確保、次世代を担う人づくりなど、すべての施策が「持続可能性」という視点で組み立てられています。

ネイチャーポジティブは、この総合計画が目指す将来像「人・まち・自然いきいき未来創造」を、自然資本の回復という側面から力強く支えるものです。

3-2 施策とSDGsの連動

第8期羅臼町総合計画の各施策には、SDGsのゴールが直接関連付けられています。ネイチャーポジティブを推進することは、単に環境を守るだけでなく、総合計画に掲げられた経済活動や社会基盤の整備を、自然の回復と好循環させる形で実行していくことを意味します。

本町では、SDGsの視点から4つの重点目標の設定と最終ゴールとして3つの最重点目標を定めています。



3-3 「魚の城下町」としての誇りと持続性

総合計画のサブタイトルである「～魚の城下町 らうす～」という言葉には、豊かな海を基盤とした地域の歴史と誇りが込められています。

ネイチャーポジティブの視点で総合計画の取組を再整理することで、「自然の回復」が「豊かな水産資源」を守り、それが「地域の経済と暮らし」を潤すというサイクルが明確になります。

既存の計画に基づいた日々の活動を、ネイチャーポジティブという新しい世界共通の視点から価値づけし直すことで、町民一人ひとりが地域の価値を再発見し、確固たる郷土愛とシビックプライドを育む一助としてまいります。

第4章 ESD（持続可能な開発のための教育）との関係

4-1 羅臼町におけるESDの歩み

羅臼町では、知床の豊かな自然環境を身近な教材とし、地域の暮らしや産業と結び付けて学ぶ「ESD（持続可能な開発のための教育）」を推進してきました。

特に、世界自然遺産という「生きた教科書」を活用した学習や、海・川・森での体験活動は、単なる知識の習得にとどまらず、自然と人との関わりを自ら考える貴重な機会となっています。

こうした学びは、学校教育だけでなく、地域の大人たちが子どもたちに知恵を伝える場を通じて育まれてきました。

羅臼にとっての ESD は、自然と共に生きる価値観を次世代へ引き継ぐための、地域一丸となった取組です。

4-2 ネイチャーポジティブを支える人づくり

ネイチャーポジティブを実現するためには、制度の構築以上に、地域の価値を理解し行動できる「人」の存在が不可欠です。ESD は、まさにその土台となる人材を育成する役割を担っています。

第 8 期羅臼町総合計画でも掲げられている通り、次世代を担う子どもたちが地域の自然や産業に触れ、その素晴らしさを学ぶことは、将来、自らの手で持続可能な地域を創り出していく力となります。

学びを通じて育まれる「地域への愛着」や「郷土への誇り」こそが、ネイチャーポジティブ推進の大きな原動力です。



4-3 学びから「シビックプライド」の醸成へ

ESD を通じた学びは、子どもたちだけでなく、関わる大人たちにとっても地域の価値を再発見する機会となります。

自分たちの暮らしや仕事が、世界の宝である知床の自然を守り、回復させることにつながっていると実感することは、確固たるシビックプライド（郷土愛と誇り）の醸成に直結します。

羅臼町では、ESD をネイチャーポジティブ推進の中核に位置づけ、「学び」を「誇り」に変え、それを具体的な「行動」へとつなげていく、人づくりのサイクルを大切にしています。



第6章 重点的に取り組む方向性（コミットメント整理）

本章では、第1章から第5章で整理した考え方を踏まえ、羅臼町がネイチャーポジティブを推進する上で、特に重視する方向性を「重点コミットメント」として整理します。

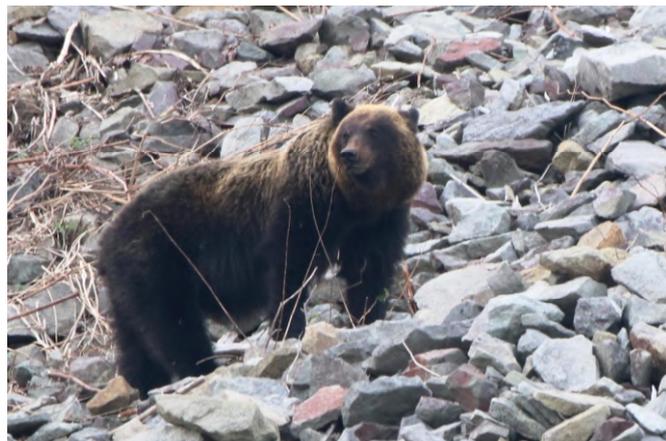
ここに示す内容は、新たな義務や数値目標を設定するものではなく、既存の取組や今後の施策検討において共有すべき視点を示すものです。

6-1 自然環境の保全・回復（生物多様性）

海・川・森の連環を意識し、生物多様性の保全と回復を重視します。

- ・流域から沿岸・海域までを一体として捉えた、自然環境の保全と回復を進めます。
- ・河川環境や沿岸環境の維持・改善を通じて、生態系の連続性を確保します。
- ・地域の知恵や科学的知見を踏まえ、自然との関わり方を次世代へ継承します。

これらの取組は、単に自然を「守る」だけでなく、地域の安全や豊かな暮らしの基盤を支えるものとして位置づけます。



6-2 自然を基盤とした産業と暮らしの持続性

自然の恵みを活かし続けることで、地域の持続性を高めていきます。



- ・徹底した資源循環とゼロカーボンシティの実現に向けた取組を推進します。
- ・自然への再投資を通じて、漁業・観光をはじめとする基幹産業の持続可能性を向上させ、環境と経済の好循環を創出します。
- ・自然と共にある暮らしの魅力を発信し、地方創生につなげます。

これらの取組は、自然と共にある暮らしの価値を高め、定住・関係人口の創出を含む地方創生にもつながるものでもあります。

6-3 学び・人づくり（ESD）と担い手育成

学びを通じた人づくりを、ネイチャーポジティブ推進の原動力とします。

- ・自然体験や地域学習を充実させ、次世代が主体的に関わる機会を創出します。
- ・地域内外の多様な人材が、羅臼の未来に関われる仕組みを構築します。
- ・ESDを通じて郷土愛やシビックプライドを育み、自ら行動できる人材を育成します。



ESDを通じた学びは、地域への誇りと主体的な行動につながり、ネイチャーポジティブ推進の原動力となります。

6-4 OECM等を活用した地域主体の自然管理

地域で守り育ててきた自然の価値を、適切に評価し世界へ発信します。

- ・管理されてきた自然環境を整理し、OECM（自然共生サイト）等の活用を検討します。
- ・世界自然遺産地域と補完し合う、持続可能な地域管理のモデルを目指します。

これらの取組を通じて、羅臼町らしい自然との関わり方を国内外に発信し、持続可能な地域管理につなげていきます。

第7章 推進体制と今後の展開

7-1 推進体制の考え方

羅臼町におけるネイチャーポジティブの推進は、特定の部局や担当に限定せず、町全体で共有する考え方として位置づけます。

町内部局間の連携を図りながら、既存の施策や事業の中でこの視点を活かすことを基本とし、必要に応じて関係団体や専門機関とも協力してまいります。

また、町民、事業者、教育機関など、多様な主体との対話を重ね、それぞれの立場で無理なく関われる体制づくりを大切にします。

7-2 国・北海道・関係機関との連携

推進にあたっては、国や北海道が進める施策や制度との連携を図り、地域の実情に応じた活用を検討します。

また、民間企業等との協働の可能性についても視野に入れ、地域資源の価値向上や持続的な取組の推進につなげていきます。

特に環境分野における支援策については、羅臼町の取組と整合を図りながら、積極的な情報収集や意見交換を行ってまいります。

7-3 未来を創るための展開と見直し

本方向性整理は、一度に完成形を目指すものではなく、社会情勢や地域の状況、科学的知見の進展などを踏まえ、段階的かつ柔軟に取組を積み重ねていきます。

私たちは、この宣言と方向性整理を出発点として、実践を通じて得られた知見を大切に蓄積していきます。そして、「羅臼町民憲章」と「知床憲章」に込められた気高い理念を、新しい時代にふさわしい形で具現化し、第8期羅臼町総合計画に描かれた「知床・らうす未来創造図」のように、子どもたちの笑顔があふれ、自然と産業が豊かに循環し、誰もが羅臼での暮らしに心からの誇り（シビックプライド）を感じられる未来を、町民の皆様と共に創り上げてまいります。

